

幼児期における関係性構築動機の発達的变化

(中間報告)

神戸大学大学院人間発達環境学研究科 古見文一

Whom Do You Want to be a friend? Preschooler's motivation to building a relationship with others

Graduate School of Human Development and Environment,

Kobe University, FURUMI, Fumikazu

要約

これまでの研究から、幼児期は心の理論の獲得時期であり、社会性の発達に重要な転換点であることがわかっている。また、日常生活においても、年代の近い多くの子どもたちと関わり合った遊びなども多くみられるようになる。しかしながら、子どもたちがどのように友人関係を構築していくかという事は明らかではない。成人については、人は自分と近い相手に対して関係性を構築する動機をもったり、関係性を構築したい相手を模倣したりするという仮説が立てられている（社会的動機仮説）。本稿では、成人を対象にして行われた関係性の構築に関わる研究と、幼児期における他者との関係性に着目した研究をレビューしつつ、幼児を対象とした関係性構築動機についての研究への展望を述べる。

【キー・ワード】 幼児, 関係性, 動機, 内集団, 外集団

Abstract

Many previous studies revealed that children develop theory of mind in their preschool age. Preschoolers build a relationship between their friends and make their own group in their daily life. However, few studies have focused on children's tendency to build a relationship with others. This article aimed to review the studies about adults' social motivation hypothesis and the studies about children's group bias. According to social motivation hypothesis, people want to build a relationship with others with similar backgrounds. This current report shed a light on a plan for the study about children's social motivation hypothesis.

【Key words】 Preschooler, relationship, motivation, ingroup, outgroup

問題と目的

発達心理学の分野において、幼児期の社会性の発達については心の理論 (Theory of Mind) の研究をはじめ数多く行われてきた (メタ分析として Wellman, Cross, & Watson, 2001)。近年では、心の理論研究から発展した他者の心の理解 (マインドリーディングやメンタライジング) に関する研究は乳児期や青年期, 成人期を対象としたものも増加している (Keysar, Barr, Balin, & Brauner, 2000; Onishi & Baillargeon, 2005)。乳児期を対象とした研究ではどれだけ早い時期に乳児が他者の心を理解する能力の萌芽をみせるかといったことが議論になる一方で、青年期や成人期を対象とした研究では、心の理論を獲得しているにも関わらず人が他者の心の理解が必要な課題をいかに間違えるかということが議論になることが多い。これらの幼児期以外を対象とした研究では、従来の幼児期を対象とした心の理論研究とは矛盾するような結果が報告されることが多いため、現在も研究者の間では議論が続いている (Low & Perner, 2012)。また、多くの研究者が他者の心の理解のシステムを複数の種類に分類することによって概念の整理を行おうとしている (Apperly, 2011; Surtees, Butterfill, & Apperly, 2012)。しかし一方で研究者がそれぞれに独自の分類で概念を分けようとしているため、統一的な見解が得られているわけではない。例えば、Apperly (2011) は他者の心の理解のシステムには低次と高次の 2 つのシステムがあると仮定し、それぞれの特徴に関しては以下のように述べている。低次なものは、処理が早く、要求する認知資源も少ないが、いわば自動的に行われるため、意識的にコントロールすることが難しいものである。一方で高次なものは、処理が遅く、ある程度の認知資源を要求され、意識的に行わなければならないが、その場に応じた柔軟な処理ができるという利点がある。また、Surtees et al. (2012) では、他者の心の理解能力を測定する際に直接的に測定された能力と間接的に測定された能力という 2 つに他者の心の理解能力を分類している。

このように研究者がそれぞれ独自に概念を解釈して用いているという問題は、幼児期における心の理論研究でも同様に起こっていると考えられる。心の理論研究で最も使用される課題に誤った信念課題があり、この課題は様々な形で使用されている。誤った信念課題のオーソドックスなものである不意移動課題が用いられる場合、複数の人物が登場するストーリーを子どもに聞かせ、登場人物の心的状態を推測させるという形がとられる。しかしながら、ストーリーの登場人物やストーリーそれ自体について各研究者が独自に作成しており、統一されていない。そのため、子どもが推測する心的状態は、ある研究ではビー玉を探す女の子の心的状態である一方で、他の研究ではジュースを探す男の子やボールを探す“クマさん”の時もある。子どもへの呈示の方法としても、パペットを用いての呈示や紙芝居形式での呈示、アニメーションによる呈示など様々なものが用いられている。このように研究の広がりとともに研究者がそれぞれに独自の形で研究を進めていることに対する批判も近年は目立っている (子安, 2016)。

Furumi, Masuda, & Koyasu (in prep) は、これらの問題点を指摘するために、同じ誤った信念課題ではあるが、登場人物が異なる複数の課題を同一の子どもに回答させた。その結果、幼児期の子どもは、全く同じ内容の課題であっても登場人物が異なれば、異なる回答を行うことがわかった。特に、架空の人物が登場人物の時よりも、実際の友人が登場人物の時の方が、早い発達段階で課題に正答す

ることが明らかとなった。しかしながら、このような差がなぜみられたのかは不明である。

そこで、本研究では、成人を対象として想定されている社会的動機仮説を参考に、子どもが複数の他者に対して異なる社会的な動機を構築する動機をもつかどうかを検証する。社会的動機仮説とは Chevallier, Kohls, Troiani Brodtkin, & Schultz (2012) が提唱しており、人は関係性を構築・維持したい相手に対し、模倣（外面的同質化）や相手に合わせた嘘（内面的同質化）によって心的距離を接近させる動機をもつと考えるものである。Furumi & Koyasu (2013, 2014) では、成人や児童において同質な他者よりも異質な他者の心を理解することの方が困難であることが指摘されている。また古見・Hamilton (2017) では、10代から20代の参加者の行動データと事後の自己報告の結果から、人は自分と外面的、あるいは内面的に近い相手をより理解したいという動機をもつことがわかっている。

一方で、これらの傾向がどれくらいの発達段階からみられるのかはわかっていない。子どもの関係性の認識については、Moore (2009) が、4歳～6歳の幼児は、シール分配課題において相手にシールを分配する際に、相手との関係性に応じて分配の割合を変えることを報告している。また、Dunham, Baron, & Carey (2011) は、最小集団条件パラダイムによって集団に割り付けられた際に、5歳児が同じ集団（内集団）を最良とする傾向をみせることを明らかにしている。しかしながら、これらの研究では、すでに構築された関係性や、自分の意思が及ばないランダムな方法で集団に割り付けられるパラダイムによって作成された関係性を扱っており、子どもが自発的にどのような相手に関係性を構築したいという動機をもつのかは不明である。

そこで、本研究では、幼児が他者との関係性を構築したいと考える動機の発達について明らかにすることを目的とする。どのような相手と関係性を構築したいと考えるかについては、社会的動機仮説から外面的および内面的な心理的距離の影響が考えられる。幼児期におけるこれらの影響を検討するため、関係性認識の発達時期と考えられる年中児・年長児を対象に心理学実験を行う。

方 法

4～6歳の幼児（年中児15名、年長児15名予定）を対象として実験の手続きを用いて調査を行う予定である。

現在の進捗状況

現在は実験に必要な材料を揃えている段階である。所属先での倫理審査の承認を得たため、今後調査先の幼稚園と相談しつつ実験を行う予定である。

引用文献

Apperly, I. A. (2011). *Mindreaders: The cognitive basis of "theory of mind"*. London: Psychology Press.

- Chevallier, C., Kohls, G., Troiani, V., Brodtkin, E. S., Schultz, R. T. (2012). The social motivation theory of autism. *Trends in Cognitive Sciences*, *16*, 231-239.
- Dunham, Y., Baron, A. S., & Carey, S. (2011). Consequences of “minimal” group affiliations in children. *Child Development*, *82*, 793-811.
- 古見文一・Antonia Hamilton (2017). ヴァーチャルリアリティ空間でロボットの心を読みたくなる? 信学技報, *117*, 183-188
- Furumi, F., & Koyasu, M. (2013). Role-play experience facilitates reading the mind of individuals with different perception. *PLoS ONE* *8*(9), e74899. doi: 10.1371/journal.pone.0074899.
- Furumi, F., & Koyasu, M. (2014). Role-play facilitates children’s mindreading of those with atypical color perception. *Frontiers in Psychology* *5*:817. doi: 10.3389/fpsyg.2014.00817.
- Keysar, B., Barr, D. J., Balin, J. A., Brauner, J. S., (2000). Taking perspective in conversation: The role of mutual knowledge in comprehension. *Psychological Science*, *11*, 32-38.
- 子安増生 (2016). 心の理論研究 35 年-第 2 世代の研究へ。子安増生・郷式徹 (編) 心の理論-第 2 世代の研究へ, , 東京, 新曜社
- Low, J. & Perner, J. (2012). Implicit and explicit theory of mind: State of the art. *British Journal of Developmental Psychology*, *30*, 1-13.
- Moore, C. (2009). Fairness in children’S resource allocation depends on the recipient. *Psychological Science*, *20*, 944-948.
- Onishi, K. H., & Baillargeon, R. (2005). Do 15-months-old infants understand false-belief? *Science*, *308*, 255-258.
- Surtees, A., Butterfill, S. & Apperly, I. A. (2012). Direct and indirect measures of Level-2 perspective-taking in children and adults. *British Journal of Developmental Psychology*, *30*, 75-86.
- Wellman, M. H., Cross, D., & Watson, J. (2001). Meta-analysis of theory-of-mind development: the truth about false belief. *Child Development*, *72*, 655-684.